

蠟梅なんきんむめ、からむめ、たうむめ、らんむめ等の名あれども、今は通名なり。この花月令廣義、玉梅臘梅、水仙、山茶、これを雪中四友といへり。臘梅は花信風に漏たれども、その花嚴冬より開き、香の馥郁たる事も梅にをとらず、實に大寒三候に配し、立春の花梅と共にめづべきものなり。〔日本樂府〕我國風氣人物、何必減西土、恨余詞鄙俚、率薄不足齒漢兒、然人苟耐讀、盡頭至尾、於治亂之機、歎名教之是非、或可以小喻。大客曰、然則是摸擬李尤耶、余哂不答、見研傍銅瓶插蠟梅、指問客曰、渠香色固讓、煤矣、然天地所置、日月所照、各含一造化、乃曰汝擬梅也、渠當肯否、曰不肯。

戊子○文政十一年嘉平月二十八日

山陽外史賴襄識

〔草木育種後編下〕

關類并胃稱の類、蠟梅（蠟梅譜）

黃梅花（花鏡）

元漢種なり、俗に南京うめといふ、磬口のもの

を漢種といひ、狗英梅を和産といふ、花小なり、冬月花を開き、梅と時を同うす、故に梅の名あり、秋月より糞水を根の廻りへ澆ぎてよし、插花に用ふ、

〔重修本草綱目啓蒙二十五〕

蠟梅（蠟梅）

ナ。ン。キ。ン。ム。メ。カ。ラ。ム。メ。ト。ウ。ム。メ。ラ。ン。ム。メ。

今通名

一名奇友（事物紀原）

九英梅（汝南圖史）

狗蠟花（汝南圖史）

狗英（花史左編）

狗纓（群芳譜）

蠟梅ノ説一ナラス、時珍ノ説ハ因其與梅同時香又相近、色似蜜蠟、故得此名ト云、群芳譜ニ人言臘

時開、故以臘名非也、爲色正似黃蠟耳ト云、又似女工撚蠟所成、故名ト云、彙苑詳註ニ來真蠟國ト云、

コノ木ハ百九代後水尾帝ノ時、朝鮮ヨリ來ルト云傳フ、故ニ俗ニカラムメ等ノ名アレドモ、今ニ

至テハ皆蠟梅ト稱ス、ソノ木叢生ス、高キ者ハ丈餘、低キ者ハ數葉對生ス、葉ノ形狹長ニシテ尖リ、

長サ四五寸、肌糙澀ニシテ加條（葉ノ如シ）、唐山ニテハミガキモノニ用ユルコト、物理小識ニ見ヘ

タリ、冬月梅ト同時ニ花ヲ開ク、皆下ニ向フ、綠萼瓣ハ細長シテ尖リ、黃白色ニシテ光リアリ、蠟花

ノ如シ、故ニ狗蠟梅ト名ク、狗蠟ノ色ニ似タルナリ、瓣ハ九出ナリ、故ニ又九英梅ト名ク、花中ニ藥

ナシ、小瓣九出シ、紫黑色ナリ、コノ花開ク時ハ其香一室ニ盈ツ、花謝シテ稀ニ實ヲ結ブ、大サ指ノ